

時代を超えても変わらないものとは何か？

10月21日（火）

「不易流行」という熟語があります。「不易」とは、「時代を超えても変わらないもの」、「流行」とは「時代の変化とともに変えていく必要のあるもの」という意味で、松尾芭蕉の言葉として伝えられています。(実際には芭蕉自身が書き残したのではなく、弟子が書いたものの中に、芭蕉の言葉として残されているそうです。松尾芭蕉は、俳諧上達の秘訣を聞かれ、「過去の自分に飽きることだ。」と答えたそうです。常に努力を重ねつつ、さらに新境地を切り開いていこうとするからこそ、そこに進歩があり、物事の根本・本質により近づけるとの考えです。「不易を知らざれば 基立ち難く、流行を知らざれば 風新たに成らず。」とあり、「不易流行」は「不易＝永遠に変わらないこと」も「流行＝変わり続けること」もどちらも大切で、基は一つであると述べています。教育現場で「不易流行」がよく使われるようになったのは、30年前の中央教育審議会答申（21世紀を展望した我が国の教育の在り方について）からであると思います。その中で不易とは「どんなに社会が変化しようとも、時代を超えて変わらない価値のあるもの」であり、流行とは「社会の変化に関心を持ち、時代の変化とともに変えていく必要があるもの」と示されています。当時の教育改革のキーワードは、「生きる力とゆとりある教育活動」でした。「社会の変化の激しい時代だからこそ目の前の事象（流行）に踊らされるのではなく、不易の教育を進めていく必要がある」という言葉に納得し、時代の流れ、社会の要請に応じた教育の大切さを理解しながらも、自分の中では「不易」が大きな比重を占めていました。しかしながら、かつてない大きな社会の変革期を迎え、今改めてこの芭蕉の言葉について考えたとき、「流行不易」～「流行」にも重きを置き、学校は外部環境の変化に主体的に適応していかなければならないことを強く感じます。文部科学省が進める「GIGAスクール構想」の取り組みにより、全生徒分のタブレットが配備され、これまでの実践にICTを組み合わせることで、教育の質の向上につなげていくことができます。子どもたちも、タブレットを効果的に活用して、自分たちの学びを充実させています。「強い者、賢い者が生き残るのではない。変化できる者が生き残るのだ。」進化論で有名なダーウィンの言葉です。今後も教職員は変えること、変わることを恐れずに、今の時代に必要な自分の資質・能力の向上にこれまで以上に努める必要を感じています。

○文化祭に向けて全校集会

